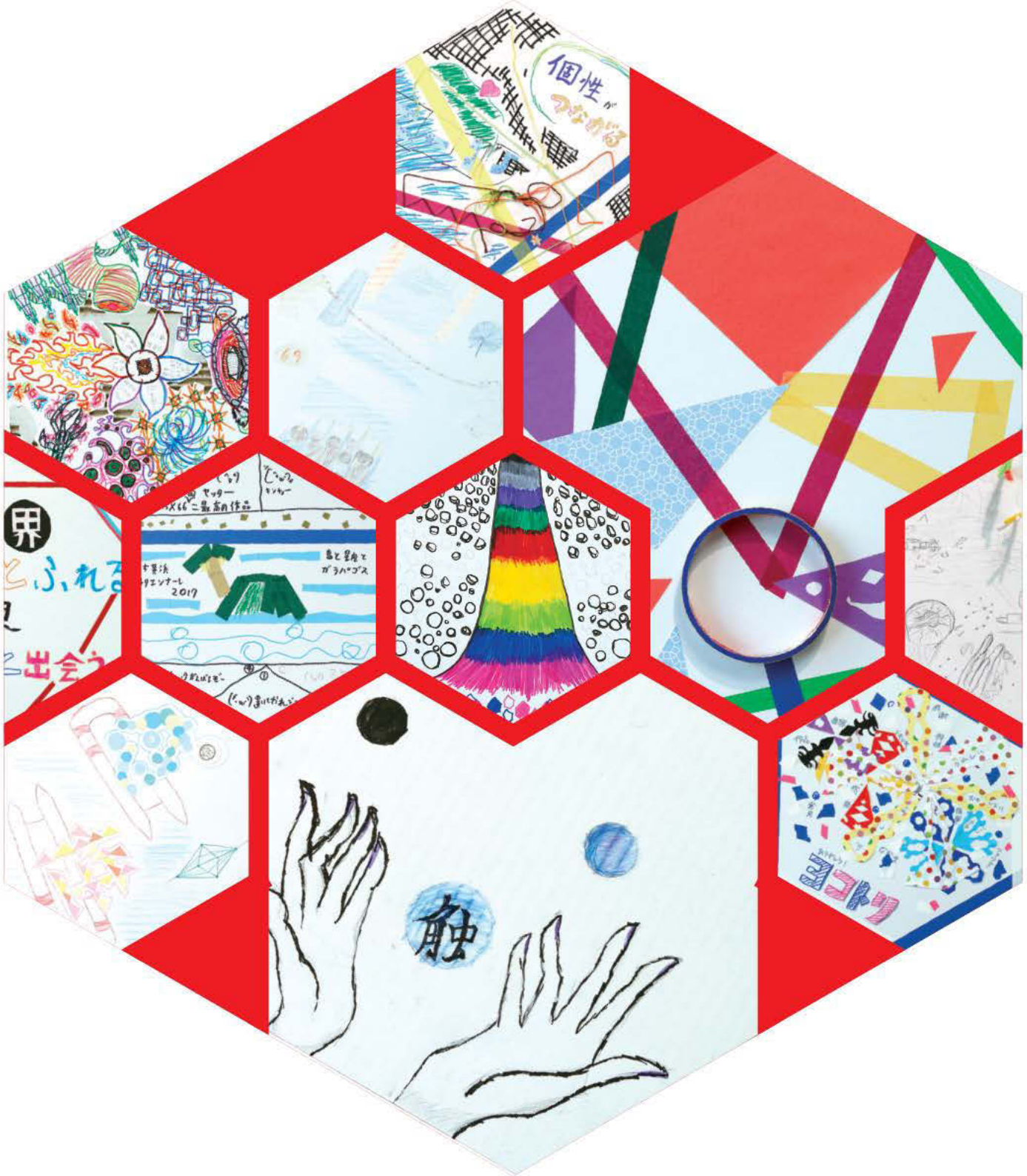

個性がつながる
界
ふれる
出会う
2017
触

みんなで
島と星座と
ガラパゴス
1つのテーマに
無限の択え方
ゴコトリ
2017
Yokohama Triennale
発想の
自由!!

孤島探検隊

島と世界をツナグ旅

横浜美術館中高生プログラム2017
ヨコトリ2017を体験しよう！伝えよう！［記録誌］

【中高生プログラム参加者】
安藤一生(中学3年)｜伊藤詩太(中学1年)
宇佐美友悠(中学2年)｜大井花歩(中学3年)
金森紫乃(中学2年)｜木暮万葉(中学2年)
小室柊太(中学1年)｜佐藤 薫(高校2年)
佐藤薫穂(高校2年)｜高橋桃子(中学2年)
土山悠夏(中学2年)｜寺田洸揮(中学1年)
二本柳姫乃(中学2年)｜檜垣菜緒(中学2年)
費 和音(中学1年)｜布施陽菜(中学1年)
水谷一聖(高校2年)｜茂木菜々(高校3年)
森アルコ(高校1年)｜柳原英紀(中学2年)

【スタッフ】
関 淳一(教育普及グループ長)
教育プロジェクト
端山聡子(チームリーダー)
大岩久美｜河上祐子
六島芳朗｜伊藤浩平
福田拓郎

【ボランティア】
池田憲夫｜井上三香
河野昭子｜三浦章子
渡辺美由紀

【インターン】
伊藤 綾｜古藤 陽

YOKOHAMA MUSEUM OF ART

表紙には、ヨコハマトリエンナーレ2017のイメージビジュアルである、ガラパゴスゾウガメにちなみ講座最終回(9月10日)にそれぞれが印象に残ったことを六角形の台紙に表現したものを使った。記録誌タイトルは中高生の提案による。

ヨコハマトリエンナーレ 2017 島と星座とガラパゴス

横浜美術館中高生プログラム2017

ヨコトリ2017を体験しよう!伝えよう![概要]

約5ヶ月にわたる中高生対象の長期プログラム。中高生がヨコハマトリエンナーレ2017の作品を通して、様々な美術の見方や楽しみ方を体験し、8月に小学生対象のプログラム「ヨコトリ2017で世界の現代アートをたのしむ!こども探検隊」を企画、実施した。プログラム終了後、番外編として有志が本誌の編集にあたった。

日程　2017年6月18日[日]〜11月23日[木・祝]
[本編8回+番外編2回]
会場　横浜美術館8階および
ヨコハマトリエンナーレ2017会場
対象　中学生、高校生
参加費　500円
参加人数　20名

ヨコハマトリエンナーレ2017を体験しよう編

第1回｜はじめに。展示室をみる
6月18日[日]10:00〜14:30
- スタッフ紹介、他己紹介
- プログラムの目的と概要の説明
- 横浜美術館の展示室を見学
- レクチャー／展示って何だろう?
ヨコハマトリエンナーレ2017 逢坂恵理子コ・ディレクター
- 横浜市開港記念会館を見に行こう!
(ヨコハマトリエンナーレ2017会場の見学)
- 今日の発見――スケッチブックの使い方――
◎参加人数19名

第2回｜アーティストと出会う。からっぽの展示室をみる
7月9日[日]10:00〜12:00
- アーティストと出会う ① 木下 晋さん@横浜美術館
- 振り返り「アーティストと出会って、感想」
- ヨコトリ2017ポケットガイドの説明
◎参加人数20名

第3回｜オープン前会場見学。こども探検隊の企画 ❶
7月30日[日]10:00〜14:00
- 展示準備状況を見学
ヨコハマトリエンナーレ2017 柏木智雄コ・ディレクター
- アーティストと出会う ②
制作中の見学[ジョコ・アヴィアントさん@横浜美術館]
- 参加アーティストの説明／美術館展示作品を中心に
- 小学生にどんなことを伝えよう?
◎参加人数18名

第4回｜アーティストと出会う。こども探検隊の企画 ❷
8月6日[日]10:00〜14:30
- アーティストと出会う ③
柳 幸典さん@横浜市開港記念会館
- こども探検隊のスケジュール、ワークショップの内容、材料や道具を考えよう
◎参加人数17名

第5回｜アーティストと出会う。こども探検隊の企画 ❸
8月11日[金・祝]10:00〜14:00
- アーティストと出会う ④ 風間サチコさん@横浜美術館
- 展示ツアーを考えよう、ワークショップ材料準備とリハーサル
◎参加人数19名

第6回｜こども探検隊リハーサル
8月20日[日]10:00〜14:00
- こども探検隊にむけ、最終リハーサルをしよう
◎参加人数19名

第7回｜ヨコトリ2017で世界の現代アートをたのしむ!こども探検隊
8月27日[日]9:30〜14:30
- 小学4〜6年生のための展示ツアーとワークショッププログラム実施
◎参加人数20名

まとめ+記録編

第8回｜これまでを振り返って
9月10日[日]10:00〜12:00
- プログラムのまとめ
◎参加人数18名

番外編1｜記録誌をつくる ❶
10月29日[日]10:00〜11:30
- 記録誌のアイデアを出し合う
◎参加人数11名

番外編2｜記録誌をつくる ❷
11月23日[木・祝]10:00〜11:30
- デザインとは?
講師:森上 暁さん(NDCグラフィックス デザイナー)
- 記録誌のアイデアを森上さんにプレゼンテーション
- 記録誌のタイトルを決める
◎参加人数10名

ヨコトリ2017で世界の現代アートをたのしむ!こども探検隊[概要]

中高生が企画した、小学生とヨコハマトリエンナーレ2017を楽しむためのプログラム。中高生がガイドとなり、5グループにわかれて展示ツアーとワークショップ、ランチ交流を行った。

日時　2017年8月27日[日]10:00〜14:00
[ランチ交流会を含む]
会場　横浜美術館8階および
ヨコハマトリエンナーレ2017会場
対象　小学4〜6年生
参加費　無料
参加人数　28名

孤島探検隊 島と世界をツナグ旅

横浜美術館中高生プログラム2017 ヨコトリ2017を体験しよう!伝えよう![記録誌]

発行にあたって

この冊子は、ヨコハマトリエンナーレ2017(以下ヨコトリ2017)の「中高生プログラム」の記録誌である。横浜トリエンナーレとは、3年に一度の現代アートの国際展で、今回は「島と星座とガラパゴス」というテーマのもと、38組の作家と1プロジェクトによる作品が展示された。ヨコトリ2017の六角形のロゴにちなみ、参加の中高生が六角形の台紙に本プログラムの感想を制作、それが表紙に使われている。● 本プログラムの準備は2017年春、今回は中高生とアーティストとの出会いを可能な限りつくろうという方向性のもとスタートした。私たちスタッフの念願がかない、中高生が直接話を聞き、質疑応答も含め交流したのは、木下晋さん、柳幸典さん、風間サチコさん(実施順)の3名である。 ● 木下さんが制作に使うのは中高生にとっても親しい文具・画材である鉛筆。孤独な人生を、尊厳をもって全うしている人々を克明に描く。「美しいものしか描かない」というアーティストの言葉から、「では、自分は何を美しいと思っていたのか」という自問自答も含め、心に響いたことが「発見ノート」から伺えた。● 柳さんとは、作品鑑賞後、明るい場所に移動して向きあった。床に胡坐で座った柳さんは、帽子を脇に置いて、「さあ、話をしよう」と態度で示してくれたので、中高生たちはいくつもの質問を発することができた。「ゴジラの目玉に見られているような感じがした」という発言に、「まさに、見つめられているという風につくった」と柳さん。ほかにも「作品から聞こえる音について」、「《Article9》の文字色の赤について」、「展示終了後作品はどうなるのか」「柳さんにとって美術とは何か」というストレートな質問も出た。後日のまとめでは、「柳さんは自分自身を削って作品を作っている人」という発言があった。● 風間サチコさんは展示室内の作品前で、喘息の病から学校に行けなくなり、登校拒否になっていじめにもあった話をしてくれた。展示作品の《登／下》の中学生がご自身の姿であることなどである。風間さんについて「明るく話しやすいが、(発言の中で)さらっと重いことを言う」というコメントがあった。 ● 開幕直前に柏木コ・ディレクターの案内で、展示準備の様子を見ながら作品の説明を聞いた折、横浜美術館のグランドギャラリーで大きな竹の作品制作に取り組んでいたジョコ・アヴィアントさんに出会った。ジョコさんが親しみをもって中高生たちに作品について説明し、接してくださったのも思い出のひとつだ。 ● 本プログラムを通して中高生たちは、アーティストと出会い、作品の話を通してアーティストの考え方や生き方を肌で感じた機会であったと思う。そうした刺激的な経験を注ぎ込んで企画・実施したのが「こども探検隊」である。この日は本プログラムのハイライト。中高生は少し大人びた顔で小学生に語りかけ、小学生はグループに分かれ展示を楽しそうに見て周り、午後はワークショップ。この日は小学生と中高生だけで時間を過ごし、私たちスタッフは離れて見守りに徹した。 ● 2017年11月、記録誌制作のため訪問したデザイン事務所でのこと。記録誌タイトルを自分たちが提案した複数案からひとつ選んだ。そして選んだタイトルの「つなぐ」の表記をカタカナか漢字にするかで、話がなかなか終わらない。5ヶ月を経て、議論ができる関係性がつくられたことの証左である。長期にわたる本プログラムの成果はこんな場面に現れるように思う。

横浜美術館　教育普及グループ　チームリーダー
主任エデュケーター／主任学芸員
端山聡子

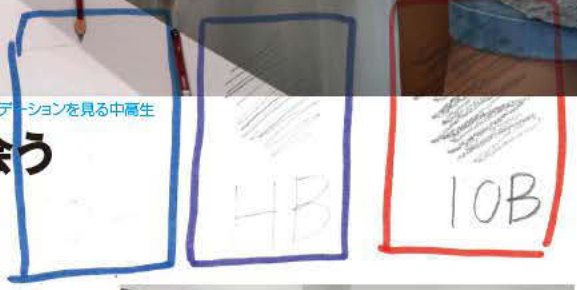
はじめに
展示室をみる
第1回｜6月18日［日］

プログラム初回。ペアになりインタビューした後、みんなの前でお互いを紹介する「他己紹介」からスタート。緊張するけれど一歩相手に近づくチャンス。1ヶ月半後には開幕する展覧会会場の図面を見ながら、逢坂コ・ディレクターより展覧会をつくる仕事には、様々な専門家が関わっているというお話を聞く。午後はトリエンナーレ会場のひとつでもある横浜市開港記念会館地下へ。柳幸典さんの作品が展示される会場を目に焼き付けた。

◆ いろんな人の力を借りて展示が作られていると分かった。
変化する美術館…!
◆ 何もない空間から、トリエンナーレでどれだけ賑やかな空間になるのか楽しみ。
◆ トリエンナーレで展示に使用する地下にある部屋に行った。
ホコリっぽくて暗かった!
◆ 現代の作品は過去から受け継がれている。
◆（展示室のことを）空間だといっていたことが心に残った。

ちょーキンチョーしたお

木下さんがつくった10Hから10Bの鉛筆による22段階のグラデーションを見る中高生



アーティストと出会う
木下 晋さん
からっぽの展示室をみる
第2回｜7月9日［日］

アーティストとの出会い第一弾は、克明に描いた鉛筆画で知られる木下晋さん。「美しいものしか描かない、外見ではなく内側の強さに美しさを感じる。」という言葉が印象的だった。レクチャーの最後には「“好き”で物事を決めてはいけない。むしろ嫌いなものに可能性があるかもしれない」というメッセージを中高生に送った。後半は作品を保護するクレートが置かれる中、展示準備中の美術館を見学した。

深みや重みを感じた。

◆ 人間のしわやしみは生きている人生の証で“美しい”もの。
◆ 孤島で独自の進化を遂げたカメ、どことなくアーティストもそんな感じ。
◆ 木下さんの作品から、周りに流されず、様々な事をのりこえた人が美しいものなのかなと感じた。
◆ 絵の画力がすごい。えんぴつのみの絵。
◆「必然的な偶然」ふたつを一緒に考えるということに新鮮さを感じた。

ジョコ・アヴィアント≪善と悪の境界はひどく縮れている≫2017 制作風景

パオラ・ピヴィ「I and I（芸術のために立ち上がらねば）」制作風景

オープン前会場見学

こども探検隊の企画 ❶

第3回｜7月30日［日］

柏木コ・ディレクターの案内で、開幕直前の会場を見学。アーティストや設営関係者が行き交う中、展示ツアーのヒントとなる話をたくさん聞いた。横浜美術館のグランドギャラリーでは、作品制作に取り組んでいるジョコ・アヴィアントさんと出会い、作品の素材としてインドネシアから運ばれてきた竹について、実際に触れながら説明を聞いた。午後は、感じたことを小学生にどう伝えるか、グループで話し合った。

変

◆ジョコ・アヴィアントさんが目の前で竹を曲げてくれたのが印象的。迫力があった。

◆実際にアーティストが来て作っていることに驚いた。

◆会場を作っているところを見れてとても面白かった（においもすごい…）写真と実際に見たのでは全然違う！

◆木のにおいや少しレッシンとするような油のようなにおいやドリルの音などいつもの美術館とはちょっと違う感じ。

◆発想が面白いとか、死んでいるようで怖いとか、反対の気持ちがどちらもひとつの作品として感じられる。

「島と星座と河ラ パゴス」というテーマに合わせつつも、作品ひとつひとつが意見をもっていた。

柳 幸典≪Project God-zilla ―横浜市開港記念会館の地下室≫2017

◆作品の目の中の映像、目の動き、音、赤い光など、いろんな感覚から作品のメッセージが伝わった。

◆私たちからは見えないものを、ゴジラの目が映し出していた。ゴジラの目に見られているような感じがして怖かった。

◆国際的な視点を持っていた。展示室に合わせて作品を作っているのが面白いと思った。

◆日本からの海外の印象、海外からの日本の印象を知っているからこその作品だと思った。

◆作品に思いを入れている。自分自身を削って作品を制作している。

アーティストと出会う

柳 幸典さん

こども探検隊の企画 ❷

第4回｜8月6日［日］

開幕直後の横浜市開港記念会館地下で柳幸典さんと待ち合わせ。作品を通して想像することの大切さについて話を聞いた。場所を移動して話が続いた。中高生からの質問が尽きない。柳さんにとって「美術」とはなんですか?とのストレートな問いに「僕自身からそれをとったら何も残らない…これをしていないと息ができない。美術という仕事に出会えてよかった」と答えてくれた。午後は美術館会場を鑑賞しながら、展示ツアーのルートについてグループで話し合った。

中高生「今日の発見ノート」より抜粋

風間サチコ《第一次幻惑大戦》2017

アーティストと出会う 風間サチコさん

こども探検隊の企画 ❸

第5回｜8月11日［金・祝］

美術館会場、風間サチコさんの作品前で待ち合わせ。木版画という制作方法を選んだ理由や、学校に馴染めなかった自身の体験が作品と繋がっている話などを聞いた。「このモチーフは何?」という中高生の問いに、作品をつくる際のテーマとなっている、「よい」「わるい」では分けられない世界観や、今起こっている出来事と作品との関連性など、ひとつひとつ丁寧に答えてくれた。

- 木版画の力強さに圧倒された!!
- 想いが強い。ひとつひとつの作品に対してじっくり話してくれた。
- 自分の体験したことを作品にしている。
- 思ったより私との共通点が多い。身近に感じた。
- 新しい見せ方に挑戦している。

明るく重い人だった。

マーク・フスティニアーニ《穴》2012

こども探検隊 リハーサル

第6回｜8月20日［日］

「こども探検隊」最終リハーサル。自分たちが思い描く展示ツアーとワークショップを、限られた時間の中で、いかに行うか。いつもは参加する側だけど一週間後には企画側として小学生をお迎えする。当日をイメージして実際に何度も会場を巡り、この数ヶ月で体験した事を思い出しながら時間ぎりぎりまでグループで話し合い、最後に小学生が使うワークショップの材料を確認した。

- 計画完成!期待!
- 知ってる事は全て伝える。
- ワークショップを考えるのが楽しい。
- 美術館をじっくり見る。いろいろな視点からひとつの作品が見れるようにする。
- いろいろな不思議なことがたくさんある。
- 作品には制作者しか分からない謎や不思議なことがたくさんある。
- そういう面白さを子どもたちに教えたい。

正直よくわかんね

木下 晋「生命の讃歌」展示風景

ヨコトリ2017で世界の現代アートをたのしむ! こども探検隊

第7回｜8月27日［日］

すべての内容を中高生が計画した、小学生とヨコハマトリエンナーレ2017を楽しむためのプログラム。5グループにわかれて中高生がガイドとなり、展示ツアーとワークショップ、ランチ交流を行った。

小学生に何を伝えるか?

いっぱい動くぞ〜開港記念会館&美術館〜

ワークショップで中高生と小学生が共同で制作した作品

柳 幸典《Project God-zilla —横浜市開港記念会館の地下室》2017

グループ—❶ 開港GO

高橋桃子、寺田洸輝、二本柳姫乃、茂木菜々

小学生参加者：6名

電車に乗り横浜市開港記念会館地下の会場へ。小学生のペースに合わせながら数回会場を巡り、柳さんから聞いた話を交え、作品について丁寧に対話した。ワークショップでは4人のアーティストが共同制作した版画作品からヒントを得て、リレー式で一枚の大きな絵を制作。オリジナルルールとして「一人15秒で描く」を追加し、ストップウォッチでしっかり時間を計りながらゲーム感覚で共同作品を作り上げた。

◆素直に不思議がってくれたり、楽しんでくれてとても楽しかったが

◆前回まで不安なことばかりだったが当日はとても早く思った通りに進行する事ができた!（中高生）

◆本番緊わった、やった。ストップウォッチのタイム・ジャストで出すのムズい。（中高生）

◆小学生の元気で乗り切れた。楽しい時間だったから早い。（小学生）

◆友達ができた。楽しい時間だったから早い。（小学生）

◆柳さんの絵のやつが良かった。（小学生）

不思議・発見！小学生プログラム!!

新鮮にぎやかワーク

グループ―❷

With美

宇佐美友悠、佐藤薫穂、檀垣菜緒、柳原英紀

小学生参加者：5名

最初に全員でフルーツバスケットをしてウォームアップ。ワークショップと関連している作品を中心に、担当を決めてお話をしながらじっくりと鑑賞した。午後は展示ツアーで見た作品をイメージしながら、プラスティックのフォークやスプーンなど、身近なものを使ってカラフルな島を制作。小学生が島を頭にのせて楽しめるよう、みんなで考えた帽子型の土台を、人数分手作りで事前に準備した。

アイ・ウェイウェイ（艾未未）《安全な通行》2016／《Reframe》2016
©Ai Weiwei Studio

- 小学生は自分たちとは違う視点をもっていて面白かった。（中高生）
- 子どもたちと自分たちとでは感じ方が全然違う！（中高生）
- もう少し作品の意味や主張などを伝えたかった。（中高生）
- 予定外のことばかりで大変！（中高生）
- 拍子抜けするほどあっと言う間。気が付けば終わっていた。（中高生）
- 小学生が一個一個の作品に対して、何で？どうして？と疑問を持てるところがすごい！（中高生）
- いろいろなものがあって想像がふくらんだ。（小学生）
- どんなものがあるかワクワクした。（小学生）

グループ―❸

Hexágono（ヘクサゴノ）

大井花歩、木暮万葉、小室柊太、佐藤 薫

小学生参加者：6名

ヘクサゴノ諸島を作ろう！

アン・サマット《成長シリーズ7》2016

まずはイラスト当てゲームでアイスブレイク。8階から展示室へ移動の間も、今から出会う作品の説明で盛り上がった。それぞれの一押し作品を紹介したり、グランドギャラリーでは、大きな壁の上に展示された作品を、離れて見たり、近づいて真下から見たり、いろいろな角度から見る方法で鑑賞を楽しんだ。ワークショップは六角形型の土台をつくり、参加者それぞれの島を制作。出来上がった島を、青い布の上に配して、海に浮かぶ諸島を表現した。

- 楽しそうにしている様子をみて「やった！」と思った。（中高生）
- 想像力、発想力がすごい。私たちと思うことが違ったところもあったけど、共通する考えもあった。（中高生）
- 共同制作の版画作品では、どこから作品を揃いたか、みんなで考えた。（中高生）
- 楽しかったし、ワクワクできた。（中高生）
- 熊の作品が心に残った。（小学生）
- もうちょっと見たかった。
- トリエンナーレが毎年あればいいな。（小学生）

オリジナルのカメ島を作ろう！

グループ──④

ゾウガメアイランド

伊藤詩太、金森紫乃、布施陽菜、森アルコ

小学生参加者：6名

最初に、触った感触だけで箱の中身を当てるゲームでアイスブレイク。みんなで話し合って決めたルートで会場を巡ったあと、8階に戻り、もう一度作品についてお話。改めて小学生の感想を聞き、丁寧に振り返る時間を設けた。ワークショップでは緩衝剤やカラフルに着色した乾燥マカロニを使い“カメ島”を制作。同じ材料から出来た、オリジナリティ溢れる作品の出来栄えに驚いた。

- たくさんの質問をしてくれた！（中高生）
- 楽しそうにワークショップをやってくれた。
- 自由な発想で面白い作品がいっぱいできた！（中高生）
- 「楽しい」と言ってもらえてよかった！（中高生）
- 作品の意味が分かって面白かった。（小学生）
- 島を作るのが楽しかった。（小学生）
- カテランさんの、自分をテーマにした作品が面白かった。（小学生）

マップオフィス「アイランド・リゾート」展示風景

ハシゴを降りた先に広がる世界！

マーク・フスティニアーニ《穴》2012

- ワークショップはみんな上手だった。小学生とは思えない!!（中高生）
- 楽しかったけど疲れた。（中高生）
- 自由にハシゴの先の世界を創った。楽ンティイ！（中高生）
- 梯子の先は暗いイメージだったのに、小学生の発想ではきれいで緑が多く、イメージが違っていて驚いた。（中高生）
- 制作は難しいと思ったけど簡単にできた。（小学生）
- ハシゴと洞窟の展示室ツアーが面白かった。（小学生）

グループ──⑤

ごはん

安藤一生、土山悠夏、費 和音、水谷一聖

小学生参加者：5名

初めにオリジナルの自己紹介ゲームでアイスブレイク。展示ツアーでは敢えて事前にルートを決めず、その場で小学生が行きたい方向を選び、進むという方法をとった。ワークショップでは、無限に続く空間を連想させる、マーク・フスティニアーニ《穴》をヒントに、中高生が紙管と竹ひごで作った制作のための土台を使って参加者それぞれが「梯子の下の世界」を表現した。

楽しんでくれた！

これまでを振り返って

第8回｜9月10日［日］

壁に貼った、6月の初回から8月まで全7回分の記録写真を見ながら、みんなでプログラムを振り返った。後半は「こども探検隊」を実施した5グループに分かれ「こんなことが楽しかった」「もっとこうすればよかった」など、感想を話し合い、スライドを見ながら他のグループに向け発表した。最後に「中高生プログラムで発見したこと」を六角形の色紙に絵や文字で表現した。

- 全体を通して刺激的な出会いが多かった。
- 作家さんに会って質問したり、お話ができてとても新鮮だった。
- 作家さんの主張や意思を知ることができ、新しい視点から見ることができた。
- 作家さんは自分の作品や作品に対する思いに深みがあった。
- 次回もできれば参加したい!楽しかったぁー!!!

記録誌をつくる

番外編

10月29日［日］

11月23日［木・祝］

プログラム本編終了後、参加者有志による記録誌編集委員会を番外編として実施。1回目は自分たちが関わった「ヨコハマトリエンナーレ2017」はどんな展覧会だったかを振り返り、みんなで記録誌表紙に載せるタイトル案を出し合った。2回目は記録誌デザインを担当しているNDCグラフィックスを訪問。「次の人が参加したくなるようなワクワクするものにしたい」というみんなの気持ちを伝え、デザイナーの森上暁さんとディスカッションしながら、未決定だった本誌タイトルを決定した。

ヨコハマトリエンナーレ2017はどんな展覧会だった?

- 今を生きているアーティストたちが作ったものは面白い。現在の世界の状況を身近に感じられた。距離が近くなった。想像できるようになった。
- 美術館のイメージが変わった。
- 自分たちも小学生に伝えることは表現だと思った。
- 冷蔵庫とコード、アートってこんなものもアートって言うのがすごい。（※ザオ・ザオ《プロジェクト・タクラマカン》）
- 部屋が分かれていていろんな世界を一日で見れた。

中高生プログラムの意義

横浜美術館の中高生プログラムのはじまりは、ヨコハマトリエンナーレ2014のアーティスティック・ディレクター森村泰昌氏の「かつて街中でよく見かけた“年齢の異なる子どもが集まる子どもだけの世界”を再現し“子どもが子どもを案内する鑑賞ツアー”を実現したい」という発想にある。 ● 横浜美術館の教育プロジェクトがこの提案を受け、中高生を大きな子ども、小学生を小さな子どもとしてプログラムを組み立てていくこととした。さらにこのプログラムを継続的な取り組みとし、2014年以降毎年実施し、今年度で4回目となった。● 各年、横浜トリエンナーレや企画展、コレクション展を対象としながら実施し、アーティストや美術にまつわる専門性などの独自の価値観に基づいて生きる大人との出会いなどのさまざまな体験を提供してきた。● 中高生という12～18歳の年代は、これから歩み始める人生に向けて、具体的に自分の進む道を見出していくにあたって、さまざまなことに出会い体験していくべき大切な時期である。● 美術にまつわりどのような生き方があるのか、さまざまな事例と実際に出会うことで、若者たちは自らの漠然とした興味を具体的なものにつなげていく自分なりの視点を獲得していくことが出来る。 ● 美術についてこんな職業がある、こんな活動がある、美術から発想を広げるとこんな生き方がある、というようなさまざまな情報を中高生に伝えることは、私たち美術館職員にもできる。しかし、自分なりの価値観を大切にして生きてゆくことの重要性を、しっかり受け止めてもらうためには、信念に基づき独自の道を本気で歩んでいるアーティストという存在との出会いが大きな意味を持ってくる。私たちが一般論として「価値観の幅は広く、ひとり一人が自分の考え方や感じ方に自信を持つことが大切」と話しても中高生たちにはなかなか届かない。中高生は騙せない、彼らは本物しか信じない。アーティストと出会い「この人にはウソがない、この人は本物だ。自分を子どもあつかいせず本気で語りかけくれている!」と感じたときに初めて中高生たちの心に響く。日頃、学校生活で、成績によって評価される立場にいる中高生たちに、美術館で価値観の多様性を体感してもらうことは非常に大切なことであると感じている。 ● また、プログラムの最後に自らが企画し実施する、「こども探検隊」の展示ツアーにおいて年少者を気づかい導くという大人としての立場を体験することにより、さらに大きく彼らが成長する姿が見られる。 ● 中高生たちが自らの歩みを始めるにあたって、今後もこのプログラムが、自らを社会に生きる一人の人間と意識していくためのひとつのステップとなっていけばと考えている。

横浜美術館 教育普及グループ グループ長
主席エデュケーター
関 淳一

*

孤島探検隊
島と世界をツナグ旅
横浜美術館中高生プログラム2017
ヨコトリ2017を体験しよう!伝えよう! [記録誌]

発行
横浜美術館
教育普及グループ 教育プロジェクト
220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1

発行日
2018年3月

協賛
NTTテクノクロス株式会社

編集
プログラム参加の中高生有志
横浜美術館 教育普及グループ教育プロジェクト

デザイン
NDCグラフィックス

撮影
御厨慎一郎(*マークのついた写真)
田中雄一郎(**マークのついた写真)

写真提供
横浜トリエンナーレ組織委員会(**マークのついた写真)

印刷
株式会社ダイトー

ヨコハマトリエンナーレ2017
「島と星座とガラパゴス」について
会期:2017年8月4日[金]～11月5日[日]
横浜トリエンナーレは、横浜市で
3年に1度行なわれる現代アートの国際展です。
これまで、国際的に活躍するアーティストの
作品を展示するほか、
新進のアーティストも広く紹介し、
世界最新の現代アートの動向を提示してきました。
6回目となる本展「島と星座とガラパゴス」では、
「接続」と「孤立」をテーマに、
相反する価値観が複雑に絡み合う
世界の状況について考え、
展覧会を構成しました。